肺がん検診（地域）

動　　向

平成27年度地域住民対象の巡回肺がん検診は実施市町村９団体、受診者数7,264名であった。

綾瀬市では、当協会と医師会とのダブル読影体制（オープンダブルチェック）を実施しており、一次検診フィルムの読影チェックのみならず精密検査機関へのデータ提供の利便を図っている。また、医師会で開催されている精密検査フィルム読影会（カンファレンス）に専門医師・放射線技師・担当職員等が参加し、一次検診フィルムとの比較等、再検証を行うことで一次検診の精度向上に努めている。

厚木市では、平成13年度より受診者の拡大を目的として、集団検診による肺がん検診から施設医療機関で実施している基本健康診査との併用検診（施設による個別検診）に移行している。医療機関にて直接撮影を実施し当該施設にて一次読影、当協会の専門医師による二次読影の体制により、読影結果を医療機関へフィードバックしている。平成27年度読影数は20,957件であり、検診実施後、フィルムの精度管理や精検結果把握のためカンファレンスを実施している。

大和市においては、平成20年度より厚木市同様の肺がんフィルム二次読影を実施しており、平成27年度の読影数4,842件となっている（集団検診と二次読影を併用）。また、レントゲン撮影機器のデジタル化に伴い、デジタル画像による二次読影の比率が年々増えてきている。厚木市と同様に今後、更なるデジタル化の拡大が予想される。

結　　果

地域住民の肺がん検診は、昨年の7,879名の約10％減少で7,264名となった。団体数としても２団体の減少であり、共に一昨年からの連続減少となった。喀痰細胞診においても同様である。男女比は３対４であり、典型的な地域型である。

表１のごとく問診により有血痰の既往症から32名（１％）が喀痰細胞診の対象者となっている。胸部Ｘ線撮影では性比のいかんにかかわらず、要精検者数は90名対73名で男性が有意に多くみられるが、要精検者数は163名（2.2％）であり、このうち精検受診者は134名で要精検者数の82.2％を占める。この点は職域の精検受診率などから比較すると、格段に検診の理想的な形になっている。しかし喀痰細胞診の該当者の率からみると、男女比は５：１となり、やはり地域においても喫煙歴の性差が数値に表れているのであろう。

表２は読影判定の結果であるが、ＤとＥすなわち精密検査が必要である分類は7,264例中2.2％の166例である。

表３は地域検診としての８市町村別にみたＸ線検査の精検別と結果であるが、総数7,264名中要精検者数は195名。そのうち精検受診者は147名で受診率は75.4％である。発見された主な疾患は、肺がん、肺結核など表のとおりであり、肺がんは７例で、伊勢原市３名、綾瀬市２名、大磯町２名である。性別は男性３名、女性４名であり、さらに年齢別にみると全体の傾向としては初回受診の40歳台前半が542名と多いが、それ以降の45歳台～50歳後半まではやや中だるみを呈していて、65歳台から75歳台まで900名～1,700名の受診傾向を示している（**表５**）。以上に述べた検診発見肺がんは、年齢別構成表の後半に集中して65歳～80歳となって、明らかな高年齢層依存の発がんであることが判然としている。ちなみに肺結核も１例を数えているが、80歳以上の男性であった。肺がんと共に肺結核も病型は不明である。

ここで厚木市および大和市の肺がん検診については、本稿の動向に記してあるとおりである（**表６**、**７**、**８**、**９**参照）。厚木市は平成13年度より、大和市は平成20年度より開始して、地域医療機関で撮影した胸部Ｘ線フィルムおよびデジタル画像として一次医療機関で読影したのち、二次読影として神奈川県予防医学協会に搬送してもらう方式である。従って直接フィルムは63施設より約7,600件、ＣＤ等電子媒体では53施設より約18,200件であり、総数としては**表６**のごとくに厚木市20,957件、大和市4,842件である。それぞれの要精検者数は539名（2.57％）、144名（2.97％）で、要精検の判定は日本肺癌学会の集団検診における判定基準Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、ＥのＤ、Ｅの両判定によるものである。肺がん検診受診者の年齢別（読影数）は、**表７**のとおりで、両市共に70歳台が21.5％、22.9％を占めている。年齢構成からみると60歳台に入ると急増の傾向にある。**表８**は、判定別の件数である。両市共にＤ、Ｅ判定は厚木市で2.6％、大和市で3.0％と、ほとんど同様の値を示しているが、Ｅだけに限ってみると1.9％とまったく同値であった。

ただし、当該肺がん検診は肝心な最終診断のフィードバックが不完全であり精度評価できないのは残念である。

関係の集計表は82頁に掲載